

春と修羅 第三集

宮沢賢治

青空文庫

七〇六 村娘

畑を過ぎる鳥の影

青々ひかる山の稜

雪菜の臺を手にくだき

ひばりと川を聴きながら

うつつにひととものがたる

七〇九 春

陽が照つて鳥が啼き

あちこちの櫛の林も、

けむるとき

ぎちぎちと鳴る 汚ない掌を、

おれはこれからもつことになる

七二一 水汲み

一九二六、五、一五、

ぎっしり生えたち萱の芽だ

紅くひかつて

仲間同志に影をおとし

上があるけば距離のしれない敷物のやうに

うるうるひろがるち萱の芽だ

……水を汲んで砂へかけて……

つめたい風の海蛇が

もう幾脈も幾脈も

野ばらの藪をすり抜けて

川をななめに溯って行く

……水を汲んで砂へかけて……

向ふ岸には

蒼い衣のヨハネが下りて

すぎなの胞子たねをあつめてゐる

……水を汲んで砂へかけて……

岸までくれば

またあたらしいサーペント

……水を汲んで水を汲んで……

遠くの雲が幾ローフかの

麵麩にかはって売られるころだ

七二四 疲労

一九二六、六、一八、

南の風も酸っぱいし

穂麦も青くひかつて痛い

それなのに

崖の上には

わざわざ今日の晴天を、

西の山根から出て来たといふ

黒い巨きな立像が

眉間にルビーか何かをはめて

三つつも立って待ってゐる

疲れを知らないあゝいふ風な三人と

せいっぱいのせりふをやりとりするため

あの雲にでも手をあてて
電気をとってやらうかな

七二五 〔道べの粗朶に〕

一九二六、六、二〇、

道べの粗朶に

何かなし立ちよつてさはり

け白い風にふり向けば

あちこち暗い家ぐねの杜と

花咲いたまゝいちめん倒れ

黒雲に映える雨の稲

そつちはさつきするどく斜視し

あるいは嘲けりことばを避けた

陰気な幾十の部落なのに

何がこんなにおろかしく

私の胸を鳴らすのだらう

今朝このみちをひとすぢいだいたのぞみも消え

いまはわづかに白くひらける東のそらも

たゞそれだけのことであるのに

なほもはげしく

いかにも立派な根拠か何かありさうに

胸の鳴るのはどうしてだらう

野原のはてで荷馬車は小さく

ひとはほそぼそ尖ってけむる

七二八 蛇踊

一九二六、六、二〇、

この萌えだした柳の枝で
 すこしあたまを叩いてやらう
 叩かれてぞろぞろまはる
 はなはだ艶で無器用だ
 がらから蛇でもない癖に
 しつぽをざらざら鳴らすのは
 それ響尾蛇に非るも
 蛇はその尾を鳴らすめり
 青い
 青い
 紋も青くて立派だし

りっぱな節奏リズムもある

さう そのポーズ

いまの主題は

「白びかりある攻勢」とでもいふのだらう

しまひにうすい桃いろの

口を大きく開くのが

役者のこはさ半分に

所謂見栄を切るのにあたる

もすこしぴちやぴちや叩いてやらう

今日は麩肥をいぢるので

蛇にも手などを出すわけだ

けれども蛇よ、

どうも、おまへにからかつてると

酸っぱいトマトをたべてるやうだ

おまへの方で遁げるのか

それではひとつわたしも遁げる

七二八 井戸

一九二六、七、八、

こゝから草削ホウをかついで行つて

玉菜畑へ飛び込めば

宗教ではない体育でもない

何か仕事の推進力と風や陽ざしの混合物

熱く酸っぱい阿片のために

二時間半がたちまち過ぎる

そいつが醒めて

まはりが白い光の網で消されると

ぼくはこゝまで戻つて来て

水をごくごく呑むのである

七二六 風景

松森蒼穹そらに後光を出せば

片頬黒い県会議員が

ひとりゆつくりあるいてくる

羊歯やこならの丘いちめん

ことしも燃えるアイリスの花

一九二六、七、一四、

七二七

〔アカシヤの木の洋燈ラムテから〕

アカシヤの木の洋燈ラムテから

風と睡さに

朝露も月見草の花も萎れるころ

鬼げし風のきもの着て

稲ライスマーシユ沼シユのくろにあそぶ子

一九二六、七、一四、

七二八

〔驟雨カダチはそそぎ〕驟雨カダチはそそぎ

土のけむりはいつさんにあがる

あゝもうもうと立つ湯気のなかに

わたくしはひとり仕事を忿る

……枯れた羊歯の葉

野ばらの根

壊れて散ったその塔を

いまそがしくめぐる蟻……

杉は驟雨のながれを懸け

またほの白いしぶきをあげる

一九二六、七、一五、

七三〇 「おしまひは」

一九二六、八、八、

「おしまひは

シャーマン山の第七峰の別当が

錦と水晶の袈裟を着て

じぶんで出てきて諫めたさうだ」

青い光霞の漂ひと翻る川の帯

その骨ばったツングース型の赭い横顔

七三〇ノ二 増水

悪どく光る雲の下に

幅では二倍量では恐らく十倍になった北上は

黄いろな波をたててゐる

鉄舟はみな敵舎へ引かれ

モーターボートはトントントン鳴らす

下流から水があくつて来て

古川あとの田はもうみんな沼になり

豆のはたけもかくれてしまひ

桑のはたけももう半分はやられてゐる

かたつむりの痕のやうにひかりながら

島になつて残つた松の下の草地と

白菜ばたけをかこんでゐる

いつの間にどうして行つたのか

その温い恐ろしい磯に

黒くうかんで誰か四五人立つてゐる

一人は網をもつてゐる

はゞきをはいて封介もゐる

水はすでに

この秋のわが糧を奪ひたるか

屋根にのぼつて展望する

厩肥の束はみなことごとく高みに運び

鍬と箕とは先刻腰まで水にひたつて

辛くも奪ひかへして来た

七三一 「黄いろな花もさき」

黄いろな花もさき

あらゆる色の種類した

畦いっばいの地しばりを

レーキでがりがり掻いてとる

川はあすこの瀬のところ

毎秒九噸の針をながす

上を見ろ

石を投げろ

まっ白なそらいっばいに

もすが矢ばねを叩いて行く

七三三 休息

一九二六、八、二七、

あかつめくさと

きむぼうげ

おれは羆熊だ 観念しろよ

遠くの雲が幾ローフかの

麵麩にかはって売られるころだ

あはは 憂陀那よ

冗談はよせ

ひとの肋を

拔身でもつてくすぐるなんて

七三四 「青いけむりで唐黍を焼き」

一九二六、八、二七、

青いけむりで唐黍を焼き

ポンドローザも皿に盛つて

若杉のほずゑの *chrysocolla* を見れば

たのしく豊かな朝餐な筈であるのに

こんなにも落ち着かないのは

今日も川ばたの荒れた畑の切り返しが

胸いっぱいにあるためらしい

……エナメルの雲鳥の声……

強ひてもひとつ

ふさふさ紅いたうもろこしの毛をもぎり

その水いろの莢をむけば

熱く苦しいその仕事か

百年前の幽かなことのやうでもある

七三五 饗宴

一九二六、九、三、

酸っぱい胡瓜をぼくぼく噛んで

みんなは酒を飲んでゐる

……土橋は曇りの午前にできて

いまうら青い櫓のけむりは

稲いちめんに這ひかゝり

そのせきぶちの杉や櫓には

雨がどしやどしや注いでゐる……

みんなは地主や賦役に出ない人たちから

集めた酒を飲んでゐる

……われにもあらず

ぼんやり稲の種類を云ふ

こゝは天山北路であるか……

さつき十ぺん

あの赤砂利をかつがせられた

顔のむくんだ弱さうな子が

みんなのうしろの板の間で

座^{むぎ}つて素^{むぎ}麵^{むぎ}をたべてゐる

(紫雲英^{ハナコ}植れば米とれるてが

藁^{ハナコ}ばりとつたて間に合あなぢや)

こどもはむぎを食ふのをやめて

ちらつとこつちをぬすみみる

七三六 「濃い雲が二きれ」

一九二六、九、五、

濃い雲が二きれ

シャーマン山をかすめて行く

(何を吐^{ぬか}して行つたつて?)

(雷沢姉妹の三だとき!)

向ふは寒く日が射して

サーペンティン
蛇紋岩の青い鋸

七三八 はるかな作業

一九二六、九、一〇、

すゝきの花や暗い林の向ふのはうで

なにかちがった風の品種が鳴つてゐる

ぎらぎら縮れた雲と青陽の格子のなかで

風があやしい匂ひをもつてふるへてゐる

そらをうつして空虚うつろな川と

黒いけむりをわづかにあげる

瓦工場のうしろの台に

冴え冴えとしてまたひゞき

ここの畑できいてゐれば

楽しく明るさうなその仕事だけれども

晩にはそこから忠一が

つかれて憤って帰ってくる

七三九 「霧がひどくて手が凍えるな」

一九二六、九、一三、

霧がひどくて手が凍えるな

……馬もぶるつとももをさせる……

縄をなげてくれ縄を

……すすきの穂も水霜でぐつしより

あゝはやく日が照るといゝ……

雉子が啼いてるぞ 雉子が

おまへの家のなからしい

……誰も居なくなつた家のなかを

餌を漁つて大股にあるきながら

雉子が叫んでゐるのだらうか……

七四〇 秋

江釣子森の脚から半里

荒さんで甘い乱積雲の風の底

稔った稲や赤い萱穂の波のなか

そこに鍋倉上組合の

けらを装った年よりたちが

けさあつまって待つてゐる

恐れた歳のとりいれ近く

わたりの鳥はつきつき渡り

野ばらの藪のガラスの実から

風が刻んだりんだうの花

……里道は白く一すぢわたる……

やがて幾重の林のはてに

赤い鳥居やスバルの塚や

おのおのの田の熟した稲に

異なる百の因子を数へ

われわれは今日一日をめぐる

青じろいそばの花から

蜂が終りの蜜を運べば

まるめろの香とめぐるい風に

江釣子森の脚から半里

雨つぶ落ちる萱野の岸で

上鍋倉の年よりたちが

けさ集って待つてゐる

七四一 煙

一九二六、一〇、九

川上の

煉瓦工場の煙突から

けむりが雲につゞいてゐる

あの脚もとにひろがった

青じろい頁岩の盤で

尖つて長いくるみの化石をさがしたり

古いけものの足痕を

うすら濁つてつぶやく水のなかからとつたり

二夏のあひだ

実習のすんだ毎日の午后を

生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに

いま山山は四方にくらく

一ペンすつかり破産した

煉瓦工場の煙突からは

何をたいてゐるのか

黒いけむりがどんどんたつて

そらいつぱいの雲にもまぎれ

白金いろの天末も

だんだん狭くちゞまって行く

七四一 白菜畑

霜がはたけの砂いっぱい
エンタシスある柱の列は
みな水いろの影をひく
十いくつかのよるとひる
病んでもだえてゐた間
こんなつめたい空気のなかで
千の芝罘白菜は
はじけるまでの砲弾になり
包頭連の七百は
立派なパンの形になった
こゝは船場を渡った人が

みんな通つて行くところだし

川に沿つてどつちへも抜けられ

崖の方へも出られるので

どうもこゝへ野菜をつくつては

盗られるだらうとみんなで云つた

けれども誰も盗まない

季節にはひとりでにかういふに熟して

朝はまつ白な霜をかぶつてゐるし

早池峰薬師ももう雪でまっしろ

川は爆発するやうな

不定な湯気をときどきあげ

燃えたり消えたりしつづけながら

どんだん針をながしてゐる

病んでゐても

あるいは死んでしまつても

残りのみんなに対しては

やっぱり川はつづけて流れるし

なんといふいゝことだらう

あゝひっそりとしたこのはたけ

けれどもわたくしが

レアカーをひいて

この砂つちにはひつてから

まだひとつの音もきいてゐないのは

それとも聞えないのだらうか、

巨きな湯気のかたまりが

いま日の面を通るので

柱列の青い影も消え

砂もくらくはなつたけれども

七四二 圃道

水霜が

みちの草穂にいつぱいで
車輪もきれいに洗はれた

ざんざんざんざん木も藪も鳴つてゐるのは
その重いつめたい雫が
いま落ちてゐる最中なのだ

霧が巨きな塊こしりになつて

太陽面を流れてゐる

さつき川から炎のやうにあがつてゐた

あのすさまじい湯気のあとだ

気管がひどくぜいぜい云ふ

かういふぜいぜい鳴る胸へ

焼酎をすこし呑みたいと思ひ

ふかした芋をたべたいと思ひ

町に心を残しながら

野菜を売った年寄りたちが

みなこの坂を帰つたのだ

七四三 「盗まれた白菜の根へ」

一九二六、一〇、一三、

盗まれた白菜の根へ

一つに一つ萱穂を挿して

それが日本主義なのか

水いろをして

エンタシスある柱の列の

その残された推古時代の礎に

一つに一つ萱穂が立てば

ぬすびと盗人がここを通るたび

初冬の風になびき日にひかつて

たしかにそれを嘲弄する

さうしてそれが日本思想
弥栄主義の勝利なのか

一〇〇一 「プラットフォームは眩ゆくさむく」

一九二七、二、一一、

プラットフォームは眩ゆくさむく

緑に塗られたシグナルや

きららかに飛ぶ氷華のなかを

あゝ狷介に学士は老いて

いまは大都の名だたる国手

昔の友を送るのです

……そのきらゝかな氷華のはてで

小さな布の行囊や

魚の包みがおろされますと

笛はおぼろにけむりはながら

学士の影もうしろに消えて

しづかに鎖すその窓は

鉛のいろの氷晶です

かがやいて立つ氷の樹

蒼々けふる山と雲

一つら過ぎゆく町のはづれに

日照はいましづかな冬で

車室はあえかなガラスのにほひ

髪をみだし黒いネクタイをつけて

朝の光にねむる写真師

東の窓はちひさな塵の懸垂と

そのうつくしいティンダル効果

客はつましく座席をかへて

双手に二月のパネルをひらく

しづかに東の窓にうつり

いちゐの囲み池をそなへた小さな医院

その陶標の門をば斜め

客は至誠を面にうかべ

体を屈して殊遇を謝せば

桑にも梨にもいつぱいの氷華

一〇〇三 実験室小景

一九二七、二、一八、

(こんなところにあるんだな)

ビーカー、フラスコ、ブンゼン燈、

(この漆喰に立ちづくめさ)

暖炉はひとりでうなってるし

黄いろな時計はびっこをひきひきうごいてゐる

(ガラスのオボーがたくさんあるな)

(あれは逆流冷却器)

(ずるぶん大きなカップだな)

(どうだきみは、苛性加里でもいっぱいやるか)

(ふふん)

雪の反射とポプラの梢

そらを行くのはオパリンな雲

あるいはこまかな氷のかけら

(分析ならばきみはなんでもできるのかい)

(あゝ物質の方ならね)

(はははは 今日は大へん謙遜だ)

まるでニュウトンそっくりだ)

(きみニュウトンは物理だよ)

(どっちにしてももう一あしだ)

教授になつて博士になれば

男爵だつてなつてなれないこともない)

(きみきみ助手が見てゐるよ)

湯気をふくふくテルモスタット

(春が来るとも見えないな)

(いや、来るときは一どに来る

春の速さはまたべつだ)

(春の速さはをかしいぜ)

(文学亜流にわかるまい、)

ぜんたい春といふものは

気象因子の系列だぜ

はじめははんの紐を出し

しまひに八重の桜をおとす

それが地点を通過すれば

速さがそこにできるだらう)

(さういふことを云つてたら

論文なんかぐにやくにやだらう)

(論文なんかぱりぱりさ)

△

(何時になればいつしよに出れる?)

(四時ならいゝよ)

(もう一時間)

(あゝ温室で遊んでないか

濟んだらぼくがのぞくから

助手がいろいろ教へてくれる)

(ではさうしよう

あの玄関のわきのだな)

(あゝさう

ひとりではひつていゝんだ

あけつばなしはごめんだぜ)

一〇〇五 「鈍い月あかりの雪の上に」

一九二七、三、一五、

鈍い月あかりの雪の上に

松並の影がひろがってゐる

ひるなら碧く

いまも螺鈿のモザイク風した影である

こんな巨きな松の枝さへ落ちてゐる

このごろのあの雨雪で折れたのだ

そこはたしかに畑の雪が溶けてゐる

玉葱と ペントステモン

なにかふしぎなからくさ模様が

苗床いちめんついてゐる

川が鼠いろのそらと同じで

音なく南へ滑つて行けば

あゝ その東は縮れた風や五輪峠や
泣きだしたいやうな甘つたるい雲だ

松は昆布とアルコール

まだらな草地はねむさを嘔く

早池峰はもやの向ふにねむり

ずうつとみなかみの

すきとほつて暗い風のなかを

川千鳥が啼いて溯つてゐる

町の偏光の方では犬の声

風がいまつめたいアイアンビツクにかはる

一〇〇八 「土も掘るだらう」

一九二七、三、一六、

土も掘るだらう

ときどきは食はないこともあるだらう

それだからといって

やっぱりおまへらはおまへらだし

われわれはわれわれだと

……山は吹雪のうす明り……

なんべんもきき

いまもきゝ

やがてはまったくその通り

まったくさうしかできないと

……林は淡い吹雪のコロナ……

あらゆる失意や病気の底で
わたくしもまたうなづくことだ

一〇二二 「甲助 今朝まだくらあに」

一九二七、三、二二、

甲助

今朝まだくらあに、

たった一人で綱取さ稼ぐさ行つたであ

……赤楊にはみんな氷華がついて

野原はうらうら白い偏光……

唐獅子いろいろの乗馬ずぼんはいでさ

新らし紺の風呂敷しよつてさ

親方みだい手ぶらぶらど振つて行つたであ

……雪に点々けぶるのは

三つ沢山の松のむら……

清水野が大曲野がら後藤野ど

一人で威張って步って

大股に行くうちはいがべあ

向ふさ着げば撰鉢だかな運搬だかな

夜では小屋の隅こさちよこつと寝せらへで

たゞの雑役人夫だからな

……江釣子森が

ぼうぼうと湯気をあげて

氷醋酸の塊りのやう……

あらがだ後藤野さかがつたころだ

一〇一四 春

一九二七、三、二三、

野原は残りのまだらな雪と
 黝ぶり滑べる夜見来川

雲が淫らな尾を引いて

青々沈む波羅蜜山の、

松のあたまをかすめて越せば

山の向ふは濁つてくらく

二すぢしろい光の棒と

わづかになまめく笹のいろ

野原はまだらな磁製の雪と

温んで滑べる夜見来川

一〇一五 「バケツがのぼって」

バケツがのぼって

鉛いろしたゴーシユ四辺形の影のなかから

いもうらかな波をたゝへて

ひざしのなかにでてくると

そこに ―ひとひら―

―なまめかしい貝―

―ヘリクリサムの花冠……

一びきの蛾が落ちてゐる

滑らかに強い水の表面張力から

四枚の翅を離さうとして

蛾はいつしんにもだえてゐる

—またたくさんの小さな気泡……

わたくしはこの早い春への突進者

鱗翅の群の急尖鋒を

温んでひかる気海のなかへ

再び発足させねばならぬ

早くも小さな水けむり

鱗粉気泡イリデスセンス

春の蛾は

ひとりで水を叩きつけて

飛び立つ

飛び立つ

飛び立つ

もういま杉の茶いろな房と

不定形な雲の間を航行する

一〇一七 開墾

一九二七、三、二七、

野ばらの藪を、

やうやくとつてしまつたときは

日がかうかうと照つてゐて

そらはがらんと暗かつた

おれも太市も忠作も

そのまゝ笹に陥ち込んで、

ぐうぐうぐうぐうねむりたかつた

川が一秒九噸の針を流してゐて

鷺がたくさん東へ飛んだ

一〇一九 札幌市

遠くなだれる灰光と

貨物列車のふるひのなかで

わたくしは湧きあがるかなしさを

きれぎれ青い神話に変へて

開拓記念の楡の広場に

力いっぱい撒いたけれども

小鳥はそれを啄まなかつた

一九二七、三、二八、

一〇二二 〔一昨年四月来たときは〕

一九二七、四、一、

一昨年四月来たときは、

きみは重たい唐鍬をふるひ、

落の根をとつたり

臺を截つたり

朝日に翔ける雪融の風や

そらはいっぱいの鳥の声で

一万のまた千億の

新におこした塊りには

いちいち黒い影を添へ

杉の林のなかからは

房毛まっ白な聖重挽馬が

こつそりはたけに下り立って

ふさふさ蹄の毛もひかつてゐた

去年の春にでかけたときは

きみたちは川岸に居て

生温い南の風が

きみのかつぎをひるがへし

またあの人の頬を吹き

紺紙の雲には日が熟し

川が鉛と銀とをながし

楊の花芽崩れるなかに

きみは次々畦を掘り

人は尊い供物のやうに

牛糞を捧げて来れば

風は下流から吹いて吹いて

キャベヂの苗はわづかに萎れ

風は白い砂を吹いて吹いて

もういくつもの小さな砂丘を

畑のなかにつくつてゐた

そしてその夏あの恐ろしい旱魃が来た

一〇二五

〔燕麦の種子をこぼせば〕

燕麦の種子をこぼせば、

砂が深くくらく、

黒雲は温く妊んで

一きれ、一きれ、

野ばらの藪を涉って行く

ぼろぼろの南京袋で帆をはって

船が一さうのぼってくる

からの酒樽をいくつかつけ

いっばいの黒い流れを、

むらきな南の風に吹かれて

一九二七、四、四、

のろのろとのぼって往けば

金貨を護送する兵隊のやうに

人が三人乗つてゐる

一人はともに膝をかゝへ

二人は憎悪のまなこして

岸のはたけや藪を見ながら

身構へをして立つてゐる

……あれらの憎悪のひとみから

あらたな文化がうまれるのか……

どんより澱むひかりのなかで

上着の肩がもそもそやぶけ

どんだん翔ける雲の上で

ひばりがくるほしくないてゐる

一〇二八 酒買船

四斗の樽を五つもつけて

南京袋で帆をはって

ねむさや風に逆って

山の鉛が溶けて来る、

重いいっばいの流れを溯り

北の方の

泣きだしたいやうな雲の下へ

船はのろのろのぼって行く

みなで三人乗ってゐる

一人はともに膝をかゝへて座ってゐるし

一九二七、四、五、

二人はじろじろこつちを見ながら立つてゐる
じつにうまくないそのつら

じぶんだけせいぜいはうたうをして

それでも不満でしかたないといふ顔付きだ

一〇三〇 春の雲に関するあいまいなる議論

一九二七、四、五、

あの黒雲が、

きみをぎくつとさせたとすれば

それは群集心理だな

この川すぢの五十里に

麦のはたけをさくつたり

桑を截つたりやつてゐる

われらにひとしい幾万人が

いままで冬と戦つて来た情熱を

うらがなくもなつかしいおもひに変へ

なにかほのかなのぞみに変へれば

やり場所のないその瞳を

みなあの雲に投げてゐる

それだけでない

あのどんよりと暗いもの

温んだ水の懸垂体

あれこそ恋愛そのものなのだ

炭酸瓦斯の交流や

いかさまな春の感応

あれこそ恋愛そのものなのだ

一〇三二 「あの大もののヨークシャ豚が」

一九二七、四、七、

あの大もののヨークシャ豚が

けふははげしい金毛ケに変わり

独楽よりひどく傾きながら

西日をさしてかけてゐる

かけてゐる

かけてゐる

まっ黒な森のへりに沿って

まだまつしぐらにかけてゐる

追つてゐるのは棒をかざして髪もひかる

日本島の里長のむすめ

梢うら枯れかかった槻の木に

ぐらぐらゆれてゐるのは夕日

里長が森をほろつと出る

なにかむしやむしや食ひながら

小手をかざしてそらを見る

一〇三三 悪意

一九二七、四、八、

夜のあひだに吹き寄せられた黒雲が、

山地を登る日に焼けて、

凄まじくも暗い朝になった

今日の遊園地の設計には、

あの悪魔ふうした雲のへりの、

鼠と赤をつかつてやらう、

口をひらいた魚のかたちのアンテリアナムか

いやしいハーデイフロックス

さういふものを使ってやらう

食ふものもないこの県で

百万からの金も入れ

結局魔窟を拵へあげる、
そこにはふさふ色調である

一〇三六 燕麦播き

白いオートの種子を播き

間に汗もこぼれれば

畑の砂は暗くて熱く

藪は陰気にくもつてゐる

下流はしづかな鉛の水と

尾を曳く雲にもつれるけむり

つかれは巨きな孔雀に酸えて

松の林や地平線

たゞ青々と横はる

一九二七、四、一一、

一〇三七 宅地

一九二七、四、一三、

日が黒雲の、

一つの棘にかくれば

やけに播かれた石灰窒素の砂利畑に

さびしく桐の枝が落ち

鼻の尖った満州豚は

小屋のなかから ぽくつと斜めに

頭には石灰窒素をくつつけながらはね出して

玉菜の茎をほじくりあるく

家のなかではひとり置かれた赤ん坊が

片っ方の眼をつぶってねむる

一〇三九 「うすく濁った浅葱の水が」

一九二七、四、一八、

うすく濁った浅葱の水が

けむりのなかをながれてゐる

早池峰は四月にはひつてから

二度雪が消えて二度雪が降り

いまあはあはと土耳其玉タキスのそらにうかんでゐる

そのいたゞきに

二すぢ翔ける、

うるんだ雲のかたまりに

基督教徒だといふあの女の

サラひとーに属する女たちの

なにかふしぎなかんがへが

ぼんやりとしてうつつてゐる

それは信仰と奸詐との

ふしぎな複合体とも見え

まことにそれは

山の啓示とも見え

畢竟かくれてゐたこつちの感じを

その雲をたよりに読むのである

一〇四〇 「日に暈ができ」

一九二七、四、一九、

日に暈ができ

風はつめたい西にまはった

ああ レーキ

あんまり睡い

(大きな黄いろな芽のなかを

たゞぼうぼうと泳ぐのさ)

杉みな昏く

かげろふ白い湯気にかはる

午

ひるになつたので

枯れたよもぎの茎のなかに

長いすねを抱くやうに座つて

一ぷくけむりを吹きながら

こつちの方を見てゐるやうす

七十にもなつて丈六尺に近く

うづまいてまつ白な髪や鬚は

まづはむかしの大木彫が

日向へ迷つて出て来たやう

日が高くなつてから

巨きなくなるみの被さつた

同心町の石を載せた屋根の下から

ひとりのつそり起き出して

鍬をかついであちこち見ながら

この川べりをやって来た

おまへの畑は甘藍などを植ゑるより

人蔘やごぼうがずっといゝ

おれがいゝ種子を下すから

一しよに組んで作らないかと

さう大声で云ひながら

俄かに何を考へたのか

いままで大きく張った眼が

俄かに遠くへ萎んでしまひ

奥で小さな飴色の火が

かなりしばらくともつてゐた

それから深く刻まれた

顔いつぱいの大きな皺が

氷河のやうに降りて来た

それこそは

時代に叩きつけられた

武士階級の辛苦の記録、

しかも殷鑑遠からず

たゞもうかはるがはるのほなし

折角の有利な企業への加入申込がないので

老いた発起人はさびしさうに、

きせるはわづかにけむりをあげて

やっぱりこつちをながめてゐる

一〇四二 「同心町の夜あけがた」

同心町の夜あけがた

一列の淡い電燈

春めいた浅葱いろしたもやのなかから

ぼんやりけぶる東のそらの

海泡石のこつちの方を

馬をひいてわたくしにならび

町をさしてあるきながら

程吉はまた横眼でみる

わたくしのレアカーのなかの

青い雪菜が原因ならば

それは一種の嫉視であるが

一九二七、四、二二、

乾いて軽く明日は消える

切りとつてきた六本の

ヒアシンスの穂が原因ならば

それもなかばは嫉視であつて

わたくしはそれを作らなければそれで済む

どんな奇怪な考が

わたくしにあるかをはかりかねて

さういふふうに見るならば

それは懼れて見るといふ

わたくしはもつと明らかに物を云ひ

あたり前にしばらく行動すれば

間もなくそれは消えるであらう

われわれ学校を出て来たもの

われわれ町に育つたもの

われわれ月給をとつたことのあるもの

それ全体への疑ひや

漠然とした反感ならば

容易にこれは抜き得ない

向ふの坂の下り口で

犬が三疋じゃれてゐる

子供が一人ぽろつと出る

あすこまで行けば

あのこどもが

わたくしのヒアシンスの花を

呉れ呉れといって叫ぶのは

いつもの朝の恒例である

見給へ新らしい伯林青を

じぶんでこてこて塗りあげて

置きすてられたその屋台店の主人は

あの胡桃の木の枝をひろげる

裏の小さな石屋根の下で
これからねむるのでないか

一〇四三 市場帰り

一九二七、四、二一、

雪と牛酪バターを

かついで来るのは詮之助

やお早う

あたまひかつて過ぎるのは

杖を杖つく村老ヤコブ

お天気ですな まっ青ですな

並木の影を

犬が黄いろに走って行く

お早うよ

朝日のなかから

かばんをさげたこどもらが

みんな叫んで飛び出してくる

一〇四六 悍馬

一九二七、四、二五、

封介の廐肥^{こえ}つけ馬が、

にはかにぱつとはねあがる

眼が紅く 竜に變つて

青びいどろの春の天を

あせつて掻いてとらうとする

廐肥が一つつぽろつとこぼれ

封介は両手でたづなをしつかり押へ

半分どてへ押つける

馬は二三度なほあがいて

やうやく巨きな頭をさげ

竜になるのをあきらめた

雲ののろしは四方に騰り

萱草芽を出す崖腹に

マグノリアの花と霞の青

ひとの馬のあばれるのを

なにもそんなに見なくてもいゝ

おまへの鍬がひかつたので

馬がこんなにおどろいたのだと

こぼれ厩肥にかぐみながら

封介はしづかにうらんで云ふ

封介は一昨日から

くらい厩で熱くむつとする

何百把かの厩肥をしばって

すつかりむしやくしゃしてゐるのだ

一〇四八 「レアカーを引きナイフをもって」

一九二七、四、二六、

レアカーを引きナイフをもって

この砂畑に来て見れば

うら青い雪菜の列に

微かな春の霜も下り

西の残りの月しろの

やさしく刷いたかをりも這ふ

しからばぼくは今日慣例の購買者に

これを配分し届けるにあたって

これらの清麗な景品をば

いかにいっしょに添へたらいゝか

しばし腕組み眺める次第

すでにひがしは黄ばらのわらひをけぶし
針を泛べる川からは
温い梵アニアの呼吸が襲ふ

一〇五三 「おい けとばすな」

一九二七、五、三、

おい

けとばすな

けとばすな

なあんだ たうとう

すつきりとしたコチニールレッド

ぎつしり白い菌糸の網

こんな色彩の鮮明なものは

この森ぢゆうにあとはない

あゝムスカリン

おい！

りんと引っぱれ！

りんと引っぱれたら！

山の上には雲のラムネ

つめたい雲のラムネが湧く

一〇五六 「秘事念仏の大元締が」

一九二七、五、七、

秘事念仏の大元締が

今日は息子と妻を使つて、

北上ぎしへ陸稻播き、
をかぼ

なまぬるい南の風は

川を溯つてやつてくる

秘事念仏のかみさんは

乾いた牛の糞コヤシを捧げ

もう導師とも恩人とも

じぶんの夫ををがむばかり

緑青いろの巨きな蠅が

牛の糞をとびめぐる

秘事念仏の大元締は

麦稈帽子をあみだにかぶり

黒いずぼんにわらぢをはいて

よちよちあるく鳥を追ふ

紺紙の雲には日が熟し

川は鉛と銀とをながす

秘事念仏の大元締は

むすこがぼんやり楊をながめ

口をあくのを情けながつて

どなつて石をなげつける

楊の花は黄いろに崩れ

川ははげしい針になる

下流のやぶからぼろつと出る

紅毛まがひの郵便屋

一〇五八 電車

一九二七、五、九、

銀のモナドのちらばるそらと

逞ましい村長の肩

……ベルを鳴らしてカーヴを切る

ベルといふより小さな銅鑼だ……

はんの木立は東邦風に

水路のへりにならんで立つ

はんの木立の向ふの方で

黒衣のこども燐酸を播く

……ガンガン鳴らして飛ばして行く……

田を鋤く馬と白いシャツ

胆礮いろの山の尾根

町へ出て行くおかみさんたち

さあつと曇る村長の顔

……うしろを過ぎるひばの木二本……

風が行ってしまつた池のやうに

いま晴れわたる村長の顔

……ベルを鳴らして一さん奔る……

栗の林の向ふの方で

ざぶざぶ水をわたる音

それから何か光など

崩れるやうなわらひ声

一〇五九 開墾地検察

一九二七、五、九、

……墓地がすっかり変ったなあ……

……なあにそれすっかり整理したもんでがす……

……ここに巨きなしだれ桜があつたがねえ……

……なあにそれ

青年団総出でやったもんでがす

観音さんも潰されあした……

……としよりたちが負けたんだねえ……

……なあに総一あたった一人できかなくなつて

それで誰^だつても負げるんでがんす……

……苗圃のあともずるぶんひどく荒れたねえ……

……なあにそれ

お上でうんと肥料したづんで

これで六年無肥料でがす……

……あちこち茶いろにぶちだしてゐる……

……はあ、

苹果の枝 兎に食はれあした

桜んぼの方は食ひあせんで

桃もやっぱり食はれあした……

……兎はとらなけあいけないよ

それでも兎の食はない種類といふんなら

花には薔薇につつじかな

果樹ではやっぱり梅だらう……

……桜んぼの方は食ひませんで

苹果と桃をたべたので……

……そらそら

その苹果の樹の幽霊だらう

その谷そこに突つたつて

いっばい花をつけてるやつは……

……はあ……

……針金製の鉄索か

この崖下で切り出すんだな……

……はあ 鉛の丸五の仕事でが……

……そんなにこれが売れるかねえ……

……はあ

耐火性だつて云つて売ってます……

……耐火性さなこの石は

あれだな開墾地は……

……はあ

上流の橋渡つて参りあす……

一〇六六 「今日こそわたくしは」

一九二七、五、一二、

今日こそわたくしは

どんなにしてあの光る青い虻どもが

風のなかから迷つて来て

縄やガラスのしきりのなかで

留守中飛んだりはねたりするか

すっかり見届けたつもりである

一〇六八 「エレキや鳥がばしやばしや翔べば」

一九二七、五、一四、

エレキや鳥がばしやばしや翔べば

九基に互る林のなかで

枯れた巨きな一本杉が

もう専門の避雷針とも見られるかたち

……けふもまだ熱はさがらず

Nymph, Nymbus, Nymphaea,……

杉をめぐって水いろなのは

羊歯から花を借りて来て

稍いっぱい飾りをつけた

やくざな榊の樹でもあらう

……最後に

火山層地帯の

小麦に就て調査せよ……

雲は淫らな尾を曳いて

しづかに森をかけちがふ

一〇七二 県技師の雲に対するステートメント

一九二七、六、一、

神話乃至は擬人的なる説述は

小官のはなはだ愧づるところではあるが

仮にしばらく上古歌人の立場に於て

黒く淫らな雨ニムフス雲に云ふ

小官はこの峠の上のうすびかりする浩気から

またここを通る野ばらのかをりあるつめたい風から

また山谷の凄まじくも青い刻鏤から

心塵身く劬くひとしくともに濯はうと

今日の出張日程に

辛くも得たる数頃を

しかく貴重に立つのであるが

そもそも黒い雨ニムプス雲よ

おまへは却つて小官に

異常な不安を持ち来し

謂はば殆んど古事記に言へる

そら踏む感をなさしめる

その故けだしいかんとならば

過ぎ来し五月二旬の間

淫らなおまへら雨ニムプス雲族は

西の河谷を覆つて去らず

日照ために常位を欠けば

稲苗すべて徒長を来し

あるいは赤い病斑を得た

おほよそかゝる事態に於て

県下今期の稲作は

憂慮なくして観るを得ず

そらを仰いで烏乎せしことや
日日にはなはだ数度であつた
然るに昨夜

かの練達の測候長は

断じて晴れの予報を通じ

今朝そら青く気は澄んで

車窓シガーのけむりをながし

峡の二十里 平野の十里

旅程明るく午を越すいまを

何たる譎詐何たる不信

この山頂の眼路遥かなる展望は

怒り身を噛むごとくである

第一おまへがここより東

鶯いろに装ほひて

連亘遠き地塊を覆ひ

はては渺茫視界のきはみ

大洋をさへ犯すこと

第二にはかの層卷雲や

青い虚空に逆つて

おまへの北に馳けること

第三 暗い気層の海鼠

五葉の山の上部に於て

あらゆる淫卑なひかりとかたち

その変幻と出没を

おまへがやゝもはゞからぬ

これらを綜合して見るに

あやしくやはらかな雨ニムブス雲よ

たとへ数箇のなまめく日射しを許すとも

非礼の香気を風に伝へて送るとも

その灰黒の翼と触手

大バリトンの流体もつて

全天抛げ来すおまへの意図は

はや瞭として被ひ得ぬ

しかればじつに小官は

公私あらゆる立場より

満腔不満の一瞥を

最後にしばしおまへに与へ

すみやかにすみやかに

この山頂を去らうとする

一〇七五 嚙語

竟に卑怯でなかったものは
あすこにかぶ黒と白
積雲製の冠をとれ

一九二七、六、一三、

一〇七六 嚙語

憤懣はいま疾やまひにかはり

わたくしはたよりなく騰つて

河谷のそらに横はる

しかも

水素よりも軽いので

ひかつてはてなく青く

雨に生れることのできないのは

何といふいらだゝしさだ

一九二七、六、一三、

一〇七七 金策

一九二七、六、三〇、

青びかりする天弧のはてに

うつくしく町がうかんでゐる

かあいさうな町よ

金持とおもはれ

一文もなく

一文の収入もない

そしてうらまれる

辞職でござる

そこで世間といふものは

中間といふものをゆるさない

なにもかもみんないけない

悪口、反感、

十八や十九でおとなよりも貪慾なこども

なにもかもみんないけない

おれは今日はもう遊ぼう

何もかも

みんな忘れてしまつて

ひなたのなかのこどもにならう

甘く熟してぬるんだ風と

なにか小さなモーターの音

この花さいた「約三字空白」の樹だ

稍いっばい蜂がとび

その膠質な影のなかを

月光いろの花弁がふり

向ふでは町がやつぱり

ひかつてそらにうかんでゐる

一〇七九 僚友

一九二七、七、一、

わたくしがかつてあなたがたと

この方室に卓を並べてゐましたころ、

たとへば今日のやうな明るくしづかなひるすぎに

……窓にはゆらぐアカシヤの枝……

ちがった思想やちがったなりで

誰かが訪ねて来ましたときは

わたくしどもはたゞ何げなく眼をも見合せ

またあるかなし何ともしらず表情し合ひもしたのでしたが

……崩れてひかる夏の雲……

今日わたくしが疲れて弱く

荒れた耕地やけはしいみんなの瞳を避けて

おろかにもまたおろかにも
昨日の安易な住所を慕ひ、

この方室にたどつて来れば、

まことにあなたがたのことばやおももちは
あなたがたにあるその十倍の強さになつて

……風も燃え……

わたくしの胸をうつのです

……風も燃え 禾草も燃える……

一〇八〇

〔さはやかに刈られる蘆や〕

一九二七、七、七、

さはやかに刈られる蘆や

水ぎぼうしの紫の花

赤くただれた眼をあげて

風を見つめるその刈り手

一〇八二 「あすこの田はねえ」

あすこの田はねえ

あの種類では窒素があんまり多過ぎるから

もうきつぱりと灌水^{みづ}を切つてね

三番除草はしないんだ

……一しんに畔を走つて来て

青田のなかに汗拭くその子……

磷酸がまだ残つてゐない？

みんな使つた？

それではもしもこの天候が

これから五日続いたら

あの枝垂れ葉をねえ

斯ういふ風な枝垂れ葉をねえ
むしつてとつてしまふんだ

……せはしくうなづき汗拭くその子

冬講習に来たときは

一年はたらいたあととは云へ

まだかゞやかな苹果のわらひをもつてゐた

いまはもう日と汗に焼け

幾夜の不眠にやつれてゐる……

それからいゝかい

今月末にあの稲が

君の胸より延びたらねえ

ちやうどシャツツの上のぼたんを定規にしてねえ

葉尖を刈つてしまふんだ

……汗だけでない

泪も拭いてゐるんだな……

君が自分でかんがへた

あの田もすっかり見て来たよ

陸羽一三二号のはうね

あれはずるぶん上手に行つた

肥えも少しもむらがないし

いかにも強く育つてゐる

硫酸だつてきみが自分で播いたらう

みんながいろいろ云ふだらうが

あつちは少しも心配ない

反当三石二斗なら

もうきまつたと云つていゝ

しつかりやるんだよ

これからの本当の勉強はねえ

テニスをしながら商売の先生から

義理で教はることでないんだ

きみのやうにさ

吹雪やわづかの仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴いて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ

ではさやうなら

……雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ……

一〇二〇 野の師父

倒れた稲や萱穂の間

白びかりする水をわたつて

この雷と雲とのなかに

師父よあなたを訪ねて来れば

あなたは縁に正しく座して

空と原とのけはひをきいてゐられます

日に日の出と日の入に

小山のやうに草を刈り

冬も手織の麻を着て

七十年が過ぎ去れば

あなたのせなは松より円く

あなたの指はかじかまり

あなたの額は雨や日や

あらゆる辛苦の図式を刻み

あなたの瞳は洞よりうつろ

この野とそらのあらゆる相は

あなたのなかに複本をもち

それらの変化の方向や

その作物への影響は

たとへば風のことばのやうに

あなたののどにつぶやかれます

しかもあなたのおもちの

今日は何たる明るさでせう

豊かな稔りを願へるままに

二千の施肥の設計を終へ

その稲いまやみな穂を抽いて

花をも開くこの日ごろ

四日つゞいた烈しい雨と

今朝からのこの雷雨のために

あちこち倒れもしましたが

なほもし明日或は明後

日をさへ見ればみな起きあがり

恐らく所期の結果も得ます

さうでなければ村々は

今年もまた暗い冬を再び迎へるのです

この雷と雨との音に

物を云ふことの甲斐なさに

わたくしは黙して立つばかり

松や楊の林には

幾すぢ雲の尾がなびき

幾層のつゝみの水は

灰いろをしてあふれてゐます

しかもあなたのおももちの

その不安ない明るさは

一昨年の夏ひでりのそらを

見上げたあなたのけはひもなく

わたしはいま自信に満ちて

ふたゝび村をめぐらうとします

わたくしが去らうとして

一瞬あなたの額の上に

不定な雲がうかび出て

ふたゝび明るく晴れるのは

それが何かを推せんとして

恐らく百の種類を数へ

思ひを尽してつひに知り得ぬものではあります

が
師父よもしもやそのことが

口耳の学をわづかに修め

鳥のごとくに軽佻な

わたくしに関することでもありますならば

師父よあなたの目力をつくし

あなたの聴力のかぎりをもって

わたくしのまなこを正視し

わたくしの呼吸をお聞き下さい

古い白麻の洋服を着て

やぶけた絹張の洋傘はもちながら

尚わたくしは

諸仏菩薩の護念によつて

あなたが朝ごと誦せられる

かの法華経の寿量の品を

命をもって守らうとするものであります

それでは師父よ

何たる天鼓の轟きでせう

何たる光の浄化でせう

わたくしは黙して

あなたに別の礼をばします

一〇二一

和風は河谷いっばいに吹く

一九二七、八、二〇、

たうとう稲は起きた

まったくのいきもの

まったくの精巧な機械

稲がそろって起きてゐる

雨のあひだまっつてみた類は

いま小さな白い花をひらめかし

しづかな飴いろの日だまりの上を

赤いとんぼもすうすう飛ぶ

あゝ

南からまた西南から

和風は河谷いっばいに吹いて

汗にまみれたシャツも乾けば

熱した額やまぶたも冷える

あらゆる辛苦の結果から

七月稲はよく分蘖し

豊かな秋を示してゐたが

この八月のなかばのうちに

十二の赤い朝焼けと

湿度九〇の六日を数へ

茎稈弱く徒長して

穂も出し花もつけながら、

つひに昨日のはげしい雨に

次から次と倒れてしまひ

うへには雨のしぶきのなかに

とむらふやうなつめたい霧が

倒れた稲を被つてゐた

あゝ自然はあんまり意外で

そしてあんまり正直だ

百に一つなからうと思つた

あんな恐ろしい開花期の雨は

もうまつかうからやつて来て

力を入れたほどのものを

みんなばたばた倒してしまつた

その代りには

十に一つも起きれまいと思つてゐたものが

わづかの苗のつくり方のちがひや

磷酸のやり方のために

今日はそろつてみな起きてゐる

森で埋めた地平線から

青くかゞやく死火山列から

風はいちめん稲田をわたり

また栗の葉をかゞやかし

いまさはやかな蒸散と

透明な汁液サツブの移転

あゝわれわれは曠野のなかに

蘆とも見えるまで逞ましくさやぐ稲田のなかに

素朴なむかしの神々のやうに

べんぶしてもべんぶしても足りない

一〇八八 「もうはたらくな」

一九二七、八、二〇、

もうはたらくな

レーキを投げろ

この半月の曇天と

今朝のはげしい雷雨のために

おれが肥料を設計し

責任のあるみんなの稲が

次から次と倒れたのだ

稲が次々倒れたのだ

働くことの卑怯なときが

工場ばかりにあるのでない

ことにむちやくちやはたらいて

不安をまぎらかさうとする、

卑しいことだ

……けれどもあゝまたあたりしく

西には黒い死の群像が湧きあがる

春にはそれは、

恋愛自身とさへも云ひ

考へられてゐたではないか……

さあ一ぺん帰って

測候所へ電話をかけ

すつかりぬれる支度をし

頭を堅く縛って出て

青ざめてこはばったたくさんの顔に

一人づつぶつつかつて

火のついたやうにはげまして行け

どんな手段を用ゐても

弁償すると答へてあるけ

一〇八九 「二時がこんなに暗いのは」

一九二七、八、二〇、

二時がこんなに暗いのは

時計も雨でいつぱいなのか

本街道をはなれてからは

みちは烈しく倒れた稲や

陰気なひばの木立の影を

めぐつてめぐつてこゝまで来たが

里程にしてはまだそんなにもあるいてゐない

そしていったいおれのたづねて行くさきは

地べたについた北のけはしい雨雲だ、

こゝの野原の土から生えて

こゝの野原の光と風と土とにまぶれ

老いて盲ひた大先達は

なかばは苔に埋もれて

そこでしづかにこの雨を聴く

またいなびかり、

林を嘗めて行き過ぎる、

雷がまだ鳴り出さないに、

あつちもこつちも、

気狂ひみたいにごろごろまはるから水車

ハックニー馬の尻ほのやうに

青い柳が一本立つ

一〇九〇 「何をやっても間に合はない」

一九二七、八、二〇、

何をやっても間に合はない

そのありふれた仲間のひとり

雑誌を読んで兎を飼って

巣箱もみんなじぶんでこさへ

木小屋ののきに二十ちかくもならべれば

その眼がみんなうるんで赤く

こつちの手からさゝげも喰へば

めじろみたいに啼きもする

さうしてそれも間に合はない

何をやっても間に合はない

その「約五字空白」仲間のひとり

カタログを見てしるしをつけて

グラヂオラスを郵便でとり

めうがばたけと椿のまへに

名札をつけて植ゑ込めば

大きな花がぎらぎら咲いて

年寄りたちは勿体ながら

通りかゝりのみんなもほめる

さうしてそれも間に合はない

何をやっても間に合はない

その「約五字空白」仲間のひとり

マツシユルムの胞子を買って

納屋をすつかり片付けて

小麦の藁で堆肥もつくり

寒暖計もぶらさげて

毎日をそゝいでゐれば

まもなく白いシヤムピニオンは

次から次と顔を出す

さうしてそれも間に合はない

何をやっても間に合はない

その〔約五字空白〕仲間のひとり

べっかふゴムの長靴もはき

オリーヴいろの縮みのシヤツも買つて着る

頬もあかるく髪もちぢれてうつくしく

そのかには

何をやっても間に合はない

何をやっても間に合はない

その〔約五字空白〕仲間のひとり

その〔約五字空白〕仲間のひとり

台地

一九二八、四、一二、

日が白かったあひだ、

赤渋を載せたり草の生えたりした、

一枚一枚の田をわたり

まがりくねった畔から水路、

沖積の低みをめぐりあるいて、

声もかれ眼もぼうとして

いまこの台地にのぼってくれば

紺青の山脈は遠く

松の梢は夕陽にゆらぐ

あゝ排水や鉄のゲル

地形日照酸性度

立地因子は青ざめて

つかれのなかに乱れて消え

しづかにわたくしのうしろを来る

今日の二人の先達は

この国の古い神々の

その二はしらのすがたをつくる

今日は日のなかでしばし高雅の神であり

あしたは青い山羊となり

あるとき歪んだ修羅となる

しかもいま

松は風に鳴り、

その針は陽にそよぐとき

その十字路のわかれの場所で

衷心この人を礼拝する

何がそのことをさまたげようか

停留所にてスイトンを喫す

一九二八、七、二〇、

わざわざここまで追ひかけて

せつかく君がもつて来てくれた

帆立貝入りのスイトンではあるが

どうもぼくにはかなりな熱があるらしく

この玻璃製の停留所も

なんだか雲のなかのやう

そこでやっぱり雲でもたべてゐるやうなのだ

この田所の人たちが、

苗代の前や田植の後や

からだをいためる仕事のとときに

薬にたべる種類のもの

除草と桑の仕事のなかで

幾日も前から心掛けて

きみのおつかさんが拵へた、

雲の形の膠朧体、

それを両手に載せながら

ぼくはたゞもう青くくらく

かうもはかなくふるへてゐる

きみはぼくの隣りに座つて

ぼくがかうしてゐる間

じつと電車の発着表を仰いでゐる、

あの組合の倉庫のうしろ

川岸の栗や楊も

雲があんまりひかるので

ほとんど黒く見えてゐるし

いままた稲を一株もつて

その入口に来た人は

たしかこの前金矢の方でもいつしよになつた
きみのいとこにあたる人かと思ふのだが

その顔も手もたゞ黒く見え

向ふもわらつてゐる

ぼくもたしかにわらつてゐるけれども

どうも何だかじぶんのことでないやうなのだ

ああ友だちよ、

空の雲がたべきれないやうに

きみの好意もたべきれない

ぼくははつきりまなこをひらき

その稲を見てはつきりと云ひ

あとは電車が来る間

しづかにこゝへ倒れよう

ぼくたちの

何人も何人もの先輩がみんなしたやうに
しづかにこゝへ倒れて待たう

穂孕期

蜂蜜いろの夕陽のなかを

みんな渴いて

稲田のなかの萱の島、

観音堂へ漂ひ着いた

いちにちの行程は

ただまつ青な稲の中

眼路をかぎりの

その水いろの葉筒の底で

けむりのやうな一ミリの羽

淡い稲穂の原体が

いまこっそりと形成され

この幾月の心労は

ぼうぼう東の山地に消える

青く澱んだ夕陽のなかで

麻シャツの胸をはだけてしやがんだり

帽子をぬいで小さな石に腰かけたり

みんな顔中稲で傷だらけにして

芬つて酸っぱいあんずをたべる

みんなのことばはきれぎれで

知らない国の原語のやう

ぼうとまなこをめぐらせば、

青い寒天のやうにもさやぎ

むしろ液体のやうにもけむって

この堂をめぐる萱むらである

青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年4月24日第1刷発行

2005（平成17）年7月15日第12刷発行

※日付の区切りの読点は、底本では中央に置かれています。

※底本の組版には、折り返しがないために、行末が確定できませんが、各項の日付は、地付きとして処理しました。

入力：伊藤雄介

校正：米田

2012年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春と修羅 第三集

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>